

9. 獨協医科大学同窓生を対象とした医師としての意識調査

¹⁾ 地域医療教育センター, ²⁾ 教育支援センター,
³⁾ リハビリテーション科学
橋本充代¹⁾, 西山 緑^{1,2)}, 田所 望^{1,2)},
稲葉未知世²⁾, 古市照人³⁾

【目的】医師のプロフェッショナルリズム（職業専門意識）について明らかにするために、本学医学部卒業生を対象にアンケート調査を実施した。

【方法】本学の第1～33期までの卒業生を対象に、2012年1月の同窓会報とともにプロフェッショナルリズムに関する自己記述式アンケート調査を発送した。アンケート回答の所要時間は約10分、無記名、郵送で返却された。

【結果】アンケートを発送した同窓生計3,188名のうち、417名（回収率13.1%）より回答を得た。回答者の属性は、平均年齢46.3歳、男性71.9%、女性28.1%であった。92.5%が常勤として勤務していた。

『医師のプロフェッショナルリズムを教育するのに重要』、および『日頃医師として仕事をする上で重要』という2側面から、プロフェッショナルリズムに関する24項目について、1～5点の5段階で質問をした結果、ともに最高点（大変重要；平均＝4.85）を得たのは、「患者について守秘義務を遵守する」であった。一方、「会議、学会、カンファレンス等にて居眠りをしない」「製薬会社の社員等と適切な境界線を保つ」では寛容な回答を得た。2側面で得点差が最も大きかった項目は「自分の医学的知識・技術、及び能力の限界を知る」、得点差が小さかったのは「患者の話を聞き、共感を示す（傾聴）」だった。

【考察】本研究結果より、医学教育上とその後の医療現場では項目によって重要性の度合いに違いがあることが示唆された。アンケートの項目内容、および点数化については、近年の医学教育の動向を反映し、再検討の必要性があると考えられる。

【結論】医師のプロフェッショナルリズムについて本学同窓生を対象とした初めてのアンケート調査であり、今後のプロフェッショナルリズム教育へ反映するため、更なる調査を検討している。

【謝辞】本学卒業生、同窓会関係者の皆様にはご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

10. 医学部における栄養教育と医師に求められる栄養の知識について

¹⁾ 獨協医科大学医学部公衆衛生学講座
²⁾ 獨協医科大学国際協力支援センター
梅澤光政¹⁾, 長尾匡則¹⁾, 内山浩志²⁾, 松下宗洋¹⁾,
西連地利己¹⁾, 春山康夫¹⁾, 小橋 元¹⁾

【目的】近年、医師には疾病の治療だけでなく、保健指導を行い、生活習慣の改善を通じて疾病の予防や改善を促すことが求められるようになりつつある。しかしながら、保健指導のために必要な知識の定量化や医学生・若手医師に対する教育の現状についての知見は少ない。そこで我々は調査を開始した。今回は医師に求められる知識の目安となるガイドライン（GL）における栄養・食事・飲酒の保健指導について報告する。

【方法】MindsGLライブラリに登録されているGL263件を対象とした。調査期間は平成29年11月17～19日である。263件のうちWeb公開のある202件（PDF形式150件、HTML形式52件）について、以下の手順で「栄養・食事」「飲酒」に関して具体的な内容が含まれている件数を集計した。PDF形式は①～③を行い、HTML形式は①と③を行った。

- ①目次、クリニカルクエスチョンを確認し、保健指導に関わる項目を抽出
- ②栄養・食事・酒・アルコールをキーワードに全文検索を実施
- ③上記より得られた内容を吟味し、医師が指導する内容の有無を評価

【結果】202GLのうち、「栄養・食事」「飲酒」に関する保健指導が含まれるGLはそれぞれ72件、29件であった。

【考察】調査したGLの保健指導の具体的な内容を含む割合は、栄養・食事が3割、飲酒が1割であった。これは少なくない割合と考えられた。これまでの我々の調査では、これらの内容を医学教育で行っている割合は高くなく、求められる知識に対して、教育が対応できていない可能性が伺われた。

【結論】多くの疾患のGLで保健指導が扱われていた。このことから、医学教育において生活習慣の疾病への影響を系統的に教えられる体制づくりが今後必要になると考えられた。